

《演奏会等報告》

(平成 26 年度)

研究活動報告

■ 猪狩 裕史

2014年度の研究活動として、次の二つの計画を立てて取り組んだ。

1. 音楽療法におけるカウンセリング理論の統合アプローチである『ミュージックカウンセリング』についての論文を準備出版する

これは、筆者の修士論文、“Music Counseling: Toward a Model of Integrative Music Therapy”を、American Music Therapy Associationの学術誌の一つ、Music Therapy Perspectivesに投稿し出版する為の準備編集活動を行った報告である。論文の概要は次の通りである。

The author proposes the integrative music psychotherapy approach called music counseling. The author reviews the four major frameworks in counseling of psychodynamic, person centered, behavioral and cognitive therapy approach. Three levels of music psychotherapy, proposed by Wheeler (1983), are reviewed and discussed. The author proposes the working definition of music counseling and interprets each element in the definition. A case study is discussed to illustrate how the integrative approach in music psychotherapy operates.

インターネットビデオ会議システムのSkypeを用いて、ラドフォード大学のジム・ボーリング教授（音楽療法）より指導を2014年7月20日、8月17日に受ける。この編集過程で、論文の内容をより強固にする為に、次の文献を追加購入した。それらは、

- Montello, L. (2010). The Performance Wellness Seminar: An Integrative Music Therapy Approach to Preventing Performance-Related Disorders in College-Age Musicians. *Music and Medicine*. 2 (2), 109-116. doi: 10.1177/1943862110364231
- Quentzel, S. & Loewy, J. (2010). An integrative bio-psycho-musical assessment model for the treatment of musicians: part I—A continuum of support. *Music and Medicine*. 2(2), 117-120. doi: 10.1177/1943862110364637
- Quentzel, S. & Loewy, J. (2010). An integrative bio-psycho-musical assessment model for the treatment of musicians: part II—Intake and assessment. *Music and Medicine*. 2(2), 121-125. doi: 10.1177/1943862110364636

論文は、11月7日に提出され、3人の査読者による判定の結果、『出版を検討するが、大規模な修正を要する』という判定が2015年1月9日に出る。査読者からは、スターン(Stern)が提唱する間主観性(Intersubjectivity)の視点と、コフート(Kohut)の自己心理学におけ

る共感(Empathy)の視点を入れることで議論が深まるという指摘があり、下記の文献を私費で購入し修正を行った。

- ・ Stern, D. N. (2010). *Forms of vitality: Exploring dynamic experience in psychology, the arts, psychotherapy, and development*. Oxford: Oxford University press.
- ・ Wigram, T. (2004). *Improvisation: Methods and techniques for music therapy clinicians, educators and students*. London: Jessica Kingsley.

2月21日に再び Skype を用いて、ボーリング教授より論文指導を受けて、3月10日締切までに修正版を再度提出する予定である。

2. 音楽療法とその関連領域の最新の研究について触れる

2014年9月19日から21日まで、名古屋国際会議場において開催された第14回日本音楽療法学会学術大会『臨床現場における人と音楽とのエンゲージメントを考える』と講習会に、実行委員の一人として参加した。中でも印象に残ったのは『精神科領域の臨床研究-実践における「エビデンス」とは何か-』と題した、国立音楽大学の阪上正巳教授の講習である。ここで阪上は、量的、質的、事例研究、現代社会と音楽療法におけるエビデンスを紹介した。特に印象に残ったのは、質的研究における“User’s evidence”、つまり音楽療法の受益者による体験も、音楽療法の効果を支持する『証拠』(エビデンス)として用いる流れが世界的に見られるということであった。同様のことは事例研究でも言えるということであった。更に情報に依存する現代社会において、情報がデータ管理化される過程では、データ化し易い、つまり『機械情報に親和的なエビデンス』(阪上、2014)が好まれる傾向があり、それにより生命情報の全ての側面が集められない危険性を指摘し、人間を全人的に捉える音楽療法がもたらす情報の貴重さ、その為に多様なエビデンスを活用することの重要性を説いていた様に思われる。

2014年11月29日から30日まで、名古屋大学東山キャンパスシンポジオンにおいて開催された第46回日本芸術療法学会『芸術の生まれるところと治療の場』に参加した。中でも印象に残ったのは、29日の最後に行われたシンポジウムであった。シンポジストの中でも、精神科医師であり音楽療法を実践されている齋藤考由氏の『芸術療法における「治療者・患者関係」をどう位置づけるか』という発表が多くの議論を呼んだ。これは芸術療法における芸術の位置付けと、治療者患者関係の力動について、神田橋條治の考えを基礎として述べられたものである。神田橋によると(齋藤より引用)、精神科領域における芸術療法の在り様には、自然治癒力と自助努力能力を伴っている病む個体としての『主体』、主体が治癒に向かう過程を支援する専門性を持たない他者としての『抱え』、そして治療技法やその能力を持った専門家としての介入としての『異物』が在る。それを踏まえて齋藤は、

『異物』である芸術と、芸術が生まれる場に存在し患者が治癒へ向かう上で重要な要素の関係性や特性について述べた。齋藤によると、芸術の本質は、『今ここ』の体験であり、『作者のからだ世界と共振れすること』と述べていた。この『今ここ』という概念は、Bruscia (2014)も音楽療法における音楽を捉える上で、音楽が存在するその場で音楽を体験している全ての人（演奏者、鑑賞者、舞台制作者）が音楽を作ること（ミュージッキング）に関わっていて相互作用を果たしていると述べており、その考え方に通じると考えられる。また齋藤自身も述べているが、『作者』というのは表現者であると同時に鑑賞者であるという観点も、療法における関係性を捉える視点として Bruscia が整理した intramusical（内的音楽的）、intrapersonal（内的人格的）、intermusical（相互音楽的）、interpersonal（相互人格的）という切り口と通じる。更には『今ここ』で起こる体験という視点を考慮すると、Bruscia の Ecological(生態学的)な関係性も含まれるであろう。また共振れという視点は、スターンの述べている Forms of vitality (人間の生得的能力で、他者の意図や感情を理解する為の物理的様子)を捉えて、体験のみならず感情を共有する『間主観性』にも通じると考えられる。いずれも前述の研究活動1を深めるのに有益なものであった。

平成 26 年度研究報告

■ 大岡 訓子

平成 26 年度個人研究費により、二つの国際ピアノコンクールを聴講した。

まず、平成 26 年 5 月 31 日～6 月 1 日東京イタリア文化会館・アニュエリホールで行われた「第 1 回イモラ国際ピアノオーディション in Japan」本選を聴講した。

このオーディションは、自由な選曲で自発的な豊かな音楽性を育成することに主な目標を置いており、個性や芸術性の表現を評価している。関連する文化活動やイタリア・イモラ・サマーフェスティバルに通じる国際交流に功績を上げるものである。小学校低学年の部～大学・一般の部までカテゴリーが分かれており、多数の参加者があった。第 1 回の開催にあたり、オーディション内容と国際的な活動面から聴講した。聴講して感じたことは、自由な演奏と、イモラ音楽院と言われるイモラ国際ピアノアカデミーについて考える機会となった。

イモラ国際ピアノアカデミーとは、イタリアでのピアノ教育として定評があり、優秀なピアニストを輩出しているアカデミーである。講師陣にはボリス・ペトルシャンスキーをはじめ、ミッシェル・ダルベルトがマスタークラスを担当するなど、素晴らしいピアニストが教育している。世界の第一線で活躍する演奏家を講師陣に持ち、演奏家の観点からピアニストの育成を行っていることが素晴らしいと考える。イタリアの現地にて研鑽を磨きたいものである。

次に、平成 27 年 1 月上旬に開催された、「第 16 回ショパン国際ピアノコンクール in ASIA」全国大会、アジア大会を聴講した。このコンクールは、ショパンの作品を課題とし、小学校低学年から一般部門、コンチェルト部門、また今年度は来年度ポーランドで開催される、ショパン国際ピアノコンクール 第 4 回派遣部門も開催された。

アジア大会では、アンジェイ・ヤシンスキ、ピオトル・パレチニ、エカティリーナ・ポボヴァ・ズイドロン、エヴァ・ポプウォッカ、但 昭義などポーランドのショパン国際ピアノコンクールの審査員を中心に高名な審査員が名を連ねた。コンチェルト部門ではポーランドの弦楽四重奏団が室内楽編成でオケを担当した。

ショパンのピアノ作品はピアニストにとっては最も重要で敬愛、尊敬する作品である。今回の聴講により、遺作の小品にも興味深いものがあり、自身の演奏プログラムに持つべく作品に、改めて演奏研究を広げる機会となったことと確信している。ショパンの演奏に

においては、様々な解釈、また演奏者の音楽性、芸術性もあり、日本人には特にショパン国際ピアノコンクールは憧れのコンクールである。

世界のフェデラシオンに登録されたコンクールの中で、ショパン国際コンクールだけが特殊な位置の存在である。しかし、それが世界で最高の権威とはいきれないが、人間の憧れと興味を引きつけるコンクールであることは間違いない。ナショナルエディションのエキエル版、その他エディション、楽譜についても見解が様々であり、ショパンの祖国ポーランドにおけるショパン演奏とは何か、と探求することは大切である。私たちが演奏する際には、作品を理解、研究し、演奏家個人の音楽性、芸術性によるショパン演奏が存在すべきであると考えます。

演奏会等報告

■ 佐藤 恵子

2014年2月21日（金） 18:15 開演 名古屋電気文化会館コンサートホール
 ポリオ撲滅チャリティーコンサート
 学友による 2014年「新春コンサート」

<連弾>

ブラームス ハンガリー舞曲より N.1 N.5 （織田寛子）

<伴奏>

モーツァルト すみれ K.476

シューベルト 鱒 op.32 D.550

シュトラウス セレナーデ op.17-2 （波多野均）

ドヴォルザーク 母の教えたまいし歌

月に寄せる歌 歌劇「ルサルカ」より（小林史子）

竹久夢二作詞 多 忠亮作曲 宵待草

北原白秋作詞 山田耕筰作曲 この道 （小林史子）

北原白秋作詞 山田耕筰作曲 からたちの花

大木惇夫作詞 服部 正作曲 野の羊 （波多野均）

モーツァルト ドンナ・アンナとドン・オッターヴィオの二重唱

歌劇「ドン・ジョバンニ」より（波多野均・小林史子）

ロータリー財団奨学生達・学友によるポリオ撲滅の為のチャリティーコンサートですが、プロデュースし伴奏しました。本校非常勤講師の方々と共演でき、音楽的な刺激を頂いただけでなく、まとまった金額を寄付でき有意義な演奏会となりました。

2014年5月23日（金） 7:00 開演 名古屋電気文化会館コンサートホール

愛知ロシア音楽研究会主催第五回演奏会

「ラフマニノフ vs ラフマニノフ」

<ソロ>

「10の前奏曲」より二長調 op.23-4

「幻想的小品集」よりエレジー op.3-1 ・前奏曲「鐘」 op.3-2

<連弾>

「6つの小品」よりロシアの歌 op.11-3 連弾（山下勝）

<6手>

ロマンス（スカローン家の3姉妹のために）（原田綾子 山下勝）

2014年12月16日（火） 6:00 開演 名古屋電気文化会館コンサートホール

ロシア民謡万華鏡 2014 愛知ロシア音楽研究会主催

<伴奏>

プロコフィエフ 「12のロシア民謡」 op.104-4 カテリーナ フレンケリ 鶴
（笥 聰子）

チャイコフスキー 「66のロシア民謡」より（本邦初演）

No.2.5.6.11.19.23.25.31.32.39.44.65 （金原聡子、川畑久子、笥聰子）

めいおんホールで演奏する機会も今年度は二度ありました。実際に舞台上で聞く音色と客席で聞く音色には差があり、これから学生達に教える上で、貴重な機会となり、課題の解決の糸口を見つけ、得難い経験となりました。

自主公演制作ミュージカル STEP!!について

■ 柴田 篤志

2013年11月、岡崎市シビックセンター内コロネットより「コロネット音楽大学シリーズ2014」への参加の打診が演奏部にもたらされた。演奏部の仲介でビジネスコースの「自主公演事業」としてこれに参画することが検討に付され、ビジネスコースの柴田、岩崎、川井三教員の合意により2014年度授業をこの自主公演事業に振り向ける決定が為された。

学生への告知は2013年度末の春休み中に為され、「新年度開始と共にどのような事業を行うかのプレゼンを行うので各自大まかな立案をするように」との指示が出された。なお、企画制作実習（岩崎担当）を履修する1年生から3年生の学生は授業内で指導を行い、授業を履修していない4年生には非公式なアドバイザーとしての参加を要請することとなった。これは4年生が企画制作に相当する授業が単位履修済みで新たに単位を付与できなかったことによる。

1、本公演までの足取り

- 4/8 企画制作実習の授業終了後に毎週火曜日昼休み、12:30より定例の会合を設けることとなる。
- 4/22 プレゼンの結果3年生小山、4年生小島の企画をシビックセンター側との協議に提出することを決定。会合を5/15（木）とする。
- 5/15 シビックセンター大島さん来学。小山が体調不良で出席できず、自動的に小山案（自主制作ミュージカル事業）を行うことに決する。この時のテーマは「からだで感じよう音楽のすばらしさ！！…観客参加型エンターテインメントミュージカル」。

決定した事業内容は以下の通り。

| | |
|-------|--------------------------|
| 主催 | 岡崎シビックセンター |
| 公演 | 名古屋音楽大学 |
| 企画・制作 | 名古屋音楽大学ビジネスコース |
| | ・小島里奈（企画・原案） |
| | ・井上采音（広報） |
| | ・小山雄平、又吉セイタク、子安唯美（制作・宣伝） |

制作

| | |
|---------|-------------------|
| 台本・脚本 | 小島里奈・柴田篤志（教員） |
| 台本・脚本補助 | 田尾下哲（教員） |
| 演出 | 千田祐妃奈、内藪奏子 |
| 演出補助 | 田尾下哲（教員）、柴田篤志（教員） |
| 音楽監督 | 内藪奏子 |
| 音楽監督補助 | 宮本芽衣 |
| 編曲 | 荒尾淳美、高原雪菜 |
| 歌唱指導 | 松下雅人 |
| 振り付け | 内藪奏子、千田祐妃奈 |
| 衣装管理 | 川口美咲希 |

舞台

| | |
|-------------|-------------------|
| 舞台監督 | 水野安美 |
| 舞台監督補助 | 岩崎将史（教員）、川井俊生（教員） |
| 音響 | 井上采音、伊藤智里 |
| 照明 | 岡崎シビックセンター |
| 舞台（プロジェクター） | 柴田貴介 |

-
- 6/3 演奏者顔合わせ、練習計画作成（火・木 18:00-21:00）
- 6/5 練習開始
- 6/5、10、12、17、19、24、26、
- 7/1、3、8、10、15、17、22、24、29、31、
- 8/2、7、20-23、26-29、
- 9/1-4、6-10（5-6 ホール練習）、16-17（ホール練習）、18（ゲネプロ）、19（本番）
- 7/3 Twitter アカウント作成、広報開始
- 7/7 チケット販売開始
- 7/17 コーラス録音
- 7/29 チラシ配布開始
- 8/22 現地ホール視察、打合せ、新聞取材（東海愛知新聞）→8/25 掲載
- 8/29 ホール施設確認
- 9/2 中日新聞による取材→9/14 掲載
- 9/5-6 ホール練習

9/16-17 ホール練習

9/18 ゲネプロ

9/19 本公演

2, 公演内容

脚本は小島が担当。演奏依頼を舞踊演劇ミュージカルコースに出すということを前提に、三年生の内園・千田をダブルヒロインとする着想を得る。

架空のミュージカルクラスがある公演を舞台にかけるまでの対立と和解を軸に、「自由と束縛」「自己実現と自己犠牲」「個人と集団」をテーマに若者達の苦悩と成長を描く。

(キャストと登場人物)

内園奏子 as カナコ

…三年生。ヒロイン。仕切り屋。努力家。ストイック。厳しい。規律重視。

千田佑妃奈 as ユキナ

…三年生。ヒロイン。自由人。天才肌。マイペース。寛容。不干涉。

平田了祐 as ヒラタ

…四年生。クラスを引退した先輩。ダンスが上手い

石黒崇真 as イシグロ

…同上。歌が上手い。

鹿島梨央、掛布紗衣、中西実咲 as リオ、サエ、ミサキ

…後輩。

吉田裕太 as ヨシダ先生

…神の如き存在。何でもお見通し。

川口美咲希 as ミヤモト先生

…ヨシダ先生の右腕で大学では助手。実技面のアドバイザー。

土井萌歌、井上葵、山田梨紗子、野田翔子 as モエカ、アオイ、リサコ、ショウコ

…後輩達

電子オルガン 荒尾淳美、高原雪菜

パーカッション 山田豊大、弓立翔也

3, 総括

飽くまで音楽ビジネスコース学生と教員による手作り公演を旗印に動き始めたが、シビックセンター主催・名古屋音楽大学後援となることでチケットを販売することとなり、入

場料を頂戴するという観点から演奏のクオリティの最低ラインを保証するという新たな課題が発生、松下、田尾下両先生を始め、多くの大学関係者にご助力をいただくこととなった。

とはいえ、練習計画も学生が組み、舞台監督も音楽監督も学生が務め、音響設計やレコーディングも学生、脚本や振り付けも学生が行うという非常にチャレンジ精神に溢れる事業となった。成功裏に終わったことは一種の奇跡とすら形容できる。

最初の関門は出演オファーであった。舞踊演劇ミュージカルコースの二人(内園・千田)に人選を任せて始まったが、質を上げる必然性から院生の協力を仰ぐこととなり、後援全編を力強く支える音楽セクション(電子オルガン奏者)の選定は二転三転し、最後は学生の出演交渉では立ちゆかなくなり数人の先生方に間に入っていただくこととなった。この人選をクリアするまでに一ヶ月以上かかり、本公演の出だしは非常に鈍かった。

企画・運営も投書計画通りには進まず、外部協力(アドバイザー)で合ったはずのビジネス四年生三人が獅子奮迅の働きで支えることとなった。下級生の参加意識が上がらない中、三年井上、二年伊藤の二名が文字通り身を粉にして働いていたことが高く賞賛できる。

練習開始は早かったが、キャストが固まるのが遅れ、台本も練習が進む中でダウンサイズされていき、キャストに合わせた改編により第四稿まで作る事となった。ただし、脚本の小島がいい本を締め切り通りに仕上げたため、台詞を覚える作業だけは遅滞を見なかった。評価できるポイントの一つと言える。

音響と写真に関してほぼ伊藤が一人で担当していたことが、本番の「予期せぬ出来事」への対応を鈍くした。同じ仕事を誰でもこなせるだけの準備が必要、との教訓を得た。

広報もほぼ井上一人が担当することとなったが、結果的にシビックセンター側との信頼関係を築くことが出来、こちらはいい結果をもたらした。役割を分散させない方がうまくいくこともあるという教訓となった。

キャストの歌唱力に差が多く、歌声が揃わないことが明らかになる中で「レコーディングした歌声を生(生の)歌声にかぶせる」という対応策が学生側からの発案でなされ、そのための素材となる録音をスタジオで行った。これも学生主導で行ったため、大変に手際は良くなかったのだが、もてるスキルを融通し合って一日という限定された時間の中で公演での使用に耐える素材を作成できた手際は見事。ただし、ここでも働くことの出来た学生は主に四年生であり、下級生の経験値とならなかったことは残念。

チラシ・ロゴなどの作成には舞台監督を務める四年の水野が大きく貢献した。特にロゴマークは Facebook、Twitter でもアイコンとして共通に使われ、広報活動に大きく貢献した。反面、チラシは納期に満足できる写真が間に合わず、いくつかの後悔を残したまま作成される結果となった。広報関係を担当三教員では十分にサポートしきれなかったことは課題である。

自主公演事業は、来年度から三年生の授業として行われる「公演実習」の予行演習としての意味合いを含め企図されたものであるが、「一から十まで全てを学生が行う」ことはやはりかなり冒険であることが証明された。その一方、それだけの冒険を躊躇わないからこそ身に付く経験もあると同時に証明されたと言って良い。問題は、そうした取り組みに非常に大きな個人差がある点であろう。

また、公演実習は飽くまで「個人の企画」であるのに対し、本自主公演は共同事業、おまけに学年を跨ぎ、先攻・コースを跨ぎ、教員も入るという「マネジメントが大変に大きな役割を持つ」ものとなっていたにもかかわらず、その運営をやはり学生が一手に担っていた為に、十全な準備が出来たとは言い難い。それが逆に、現場でなんとか工夫をする、という対応力を引き出す結果となったのはある意味皮肉なことだが、公演実習も同様に「やってみる」ことによって狙っていたものとは異なる効果を手に入れられる授業となっていくことが予想できた。

自主公演には時間も費用も労力もかかり、同じ規模の企画を毎年出来るとはとても思えない。今回、機会を与えていただいたことに深く感謝すると共に、学生には本当に大きな経験値をもたらしたことは間違いない、と強く結論づけたい。

2014 年度活動報告 舞踊演劇ミュージカル 田尾下哲

私は本年度から本学の教員として採用していただいたのですが、それまでは演出、劇作だけで活動をしてきましたので、本年度は仕事の整理が出来ておらず、多くの外部演出・劇作品が続きました。それらの活動の報告をさせていただきます。

2014 年 4 月 （東京文化会館）

東京春・音楽祭 ワグナー作曲《ラインの黄金》（田尾下：映像演出）

マレク・ヤノフスキ指揮、NHK交響楽団、エギルス・シリンス他。

2014年から2017年まで、から4年がかりで上演されるワグナー作曲《ニーベルングの指輪》の序夜として《ラインの黄金》を上演しました。上演といってもこの公演は指揮者のマレク・ヤノフスキとNHK交響楽団がメインであり、東京文化会館の舞台上にオーケストラが並び、歌手も衣裳を着けることなく演奏会形式として歌いました。その背景に映像を出す、映像（CG）演出を私は担当しました。歌手が歌っている間は映像を動かすな、など様々な要求が指揮者からあり、指揮者は「音楽が全て語るの、映像で説明する必要などない」という見解で、当初は海外へ輸出できるだけのクオリティーの映像を作り、歌手も衣裳を着けて、というオーダーでしたが指揮者の希望を最優先にするためにCG作成作業などが全てキャンセルになるなど、ドタバタしたプロダクションでした。最終的には転換音楽のところでは映像を大きく動かし、それ以外は緩やかに川がたゆたう様子やもやが動く程度にしました。一方で、果たして音楽だけでドラマを観客が理解できるかということに関しては、疑問が残ります。実際に歌手が燕尾服を着て歌っているだけでは「誰が殺されたか」という今後の物語の展開には重要な事柄さえ伝わらず、ワグナーはこの作品を音楽「劇」として作曲したことを改めて痛感した公演でした。



2014年5月 （とよはし穂の国PLAT、シアター1010）

田尾下哲作《ベアトリーチェ・チェンチの肖像》（田尾下：作・演出）

茂野雅道作曲、沢田祐二照明、Akane Liv、戸井勝海、岸田研二他。

新作戯曲を今後も上演される作品とするために、作品をリーディング（言葉のみ）、スタジオ公演（言葉に身体が足される）、本公演（言葉、身体に舞台、衣裳、照明が足される）へとステップアップすることで磨いて行く意図のプロジェクトのスタジオ公演でした。リーディングに比べて、セリフは20パーセント近く削り、簡易的な衣裳に舞台美術でしたが、沢田祐二さんの照明が加わり、緊迫感のある芝居となりました。作曲家の茂野雅道さんにはリーディング公演から音楽をつけてもらっており、芝居用に音楽を修正してもらいながらの公演となりました。



2014年6月28, 29日 （日生劇場）

日生劇場 ロルカとアンダルシア（田尾下：台本・構成・演出）

石塚隆充、伊礼彼方、飯田みち代他。

フランコ政権の初期、芸術家ロルカは殺されました。名前だけは知られていても、その実態はあまり知られていないとっていいロルカに関して、ロルカの人生を追いながら、ロルカの取

集した詩、スペイン音楽を散りばめながら、11月に行われるロルカをテーマとしたオペラ『アイナダマール』のためのプレコンサートとなりました。



2014年7月4日～13日（日生劇場）

ホリプロ 『天才執事ジーヴス』（田尾下：演出）

ウエンツ瑛士、里見浩太郎他。

P.G.ウッドハウスのイギリスではよく知られたジーヴスもの、作家のアラン・エイクボーンが台本を書き、アンドリュー・ロイド＝ウェバーが作曲した喜劇ミュージカルでした。ウエンツ瑛士、里見浩太郎さんを主演として、アイドルやお笑い芸人さんたちとともに、イギリス喜劇がどこまで日本に通じるかどうかを吟味しながら上演しました。



2014年7月27日（栃木市栃木文化会館）

プッチーニ作曲《ラ・ボエーム》（田尾下：演出）

河原忠之ピアノ、望月哲也、吉原圭子他。

コンサートホールで行われる、ピアノ一台によるオペラでした。照明も明暗をつけるくらいで限りなくシンプルに、でも、一線で活躍する歌手たちにより上質の舞台になったと思います。合唱団はいなかったの、合唱のシーンはピアノでメロディーを弾いてもらうか、カットするかをしましたが、実質10パーセント程度のカットしかせずにはほぼ全曲を演奏しました。

2014年10月10, 11日 (びわ湖ホール)

びわ湖ホール ヴェルディ作曲《リゴレット》(田尾下: 演出)

沼尻竜典指揮日本センチュリー交響楽団、沢田祐二照明、幹子S. マックアダムス装置、アレックスアンドロ・チャンマルーギ衣裳、キミホ・ハルバート振付。

堀内康雄、牧野正人、幸田浩子、森谷真理、福井敬、ジョン・ヌッツォ他。

これほど知られた演目をどのように上演するか、演出家としては迷うところですが、2002年に演出したときに、原作のユゴー『逸楽の王』に描かれていてもオペラでは描かれていないためにオペラの台本だけでは分からないところがあると感じ、今回は原作の設定を取り入れることで、オペラ台本だけでは分からないといわれるところの首尾一貫した解釈を試みました。



2014年11月12-16日 (日生劇場)

日生劇場 ゴリホフ作曲《アイナダマール》(田尾下: 第一部 台本・構成)

広上淳一指揮読売交響楽団、栗国淳演出、飯田みち代、横山恵子、長谷川初範他。

役者の長谷川初範さんがロルカを追う南米のジャーナリストを演じ、ロルカの生涯を語りながら、オペラへの序奏としました。



2014年11月22, 23, 24, 26日 (日生劇場)

二期会 カールマン作曲《チャルダシュの女王》(田尾下：台本・演出)

三ツ橋敬子指揮東京交響楽団、沢田祐二照明、幹子S. マックアダムス装置、小栗菜代子衣裳、
キミホ・ハルバート振付、腰越満美、醍醐園佳、小貫岩夫、古橋郷平他。

初演台本が見つからない中、いくつかの現行版上演台本を参考にしながらも、初演時の曲の並びを変えずに物語を描くことを指揮者の三ツ橋敬子さんと話し合っけて決めて、台本を書くことから作業を始めました。振付のキミホ・ハルバートさんの計算し尽くされたステージング、振付と相まって、オペラ歌手だから歌に集中して、というスタンスではなく、歌って踊って芝居して…限界に挑戦したプロダクションでした。



2014年12月31日 (サントリーホール)

サントリーホール ジルベスターコンサート (田尾下：構成・演出)

ルドルフ・ビーブル指揮ウイーン・フォルクスオーパー交響楽団、天羽明恵、
メルツァード・モンタゼーリ、松本志のぶ他。

ソプラノのアンドレア・ロストが急病のため、急遽天羽明恵さんが出演してくれました。新年へのカウントダウンが要となるジルベスターコンサートですが、今年は指揮者が85才と恒例であることも考え、音楽でのカウントダウンではなく、司会の松本志のぶさんの進行の許、マエストロには書で『未』を書いてもらって、新年のファンファーレをこのコンサートのために

トロンボーン奏者に作曲してもらい、奏めました。



2015年1月12日 (サントリーホール)

成人の日コンサート 《トゥーランドット》～三つの謎 (田尾下：台本・演出)

園田隆一郎指揮新日本交響楽団、岡田昌子、樋口達哉、安蘭けい、平方元基他。

毎年行われている MC で物語を伝えてハイライト上演をする企画で、トゥーランドット姫の側近として元宝塚の安蘭けいさんに進行をしてもらいながら、オーケストラを取り巻くステージで、衣裳を着けて演じました。



竹内 梓 研究紀要演奏会報告書（第34回）

■ 竹内 梓

2014年3月20日（木）

- 演奏者氏名 竹内 梓
- 演奏研究テーマ 第44回名古屋管楽五重奏団演奏会
- 主催 名古屋管楽五重奏団
- 場所 電気文化会館 ザコンサートホール
- 目的及び内容

目 的 定期演奏会

内 容 フルート、オーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴット、ピアノによる演奏

| | | |
|-----|--------|--------|
| 出演者 | フルート | 竹内 梓 |
| | オーボエ | 小木曾栄里子 |
| | クラリネット | 山川真喜子 |
| | ファゴット | 加藤 佑 |
| | ホルン | 吉田 章 |
| | ピアノ | 桑野郁子 |

- | | |
|------------------|-------------------|
| ・ユモレス | A. ツェムリンスキー |
| ・木管五重奏曲へ長調「アメリカ」 | A. ドヴォルザーク（ワルター編） |
| ・木管五重奏曲二長調 作品95 | B. フェルステル |
| ・六重奏曲 | F. プーランク |

◎研究に関する自己評価及び今後の展望

私が代表をしている名古屋管楽五重奏団の第44回定期演奏会である。木管五重奏曲のオリジナル作品の他、聴衆の、耳馴染みのある曲を選曲してほしいとの要望に応えるため、弦楽四重奏曲として有名な作品の木管五重奏への編曲作品を1曲加えた。ピアノとの六重奏曲は、とても演奏効果のある曲で、今回も聴衆の反応も大変良かった。ただ、当日の演奏中、合図の曖昧さから、アンサンブルの乱れが生じた箇所があった。今後さらに、演奏の精度を向上させる条件として、演奏者同士の曲の開始、停止、テンポの変化などを示す合図の明確さの徹底の必要を大いに感じた。



2014年9月7日（日）

- 演奏者氏名 竹内 梓
- 主 催 名古屋演奏家育成塾実行委員会/名古屋市文化振興事業団
日本室内楽アカデミー
- 演奏研究テーマ 名古屋演奏家育成塾 第20回&10周年記念フェスティバル
- 場 所 アートピアホール
- 目的及び内容
 - 目 的 記念コンサート
 - 内 容 フルート、クラリネット、ヴァイオリン、チェロ、ピアノ、マリンバによる演奏
 - 出演者 フルート 竹内 梓
クラリネット 竹内雅一
ヴァイオリン 中村ゆかり
チェロ 天野武子
ピアノ 佐々木仔利子、森本恵美子
マリンバ 栗原幸江

・ボレロ

M. ラヴェル（小林啓一 編）

◎研究に関する自己評価及び今後の展望

若手演奏家の育成を目的に発足した名古屋演奏家育成塾の実行委員会主催による第20回そして、10周年記念のコンサートである。今回はフェスティバルなので、今まで開催した演奏会で受賞した選抜者と現役演奏家の推進アドバイザーとの合同演奏会である。若手演奏家の演奏披露する機会の提供と、さらに会場で演奏直後にアドバイザーによるストレートなコメントをする企画はとても斬新であり塾生にとってとても有意義である。さらに、20回、10年間継続し地元で活躍する新進演奏家の育成の成果をあげている。コンサート当日も、塾生や現役演奏家アドバイザーの皆さんの熱のこもった多彩なプログラムによる演奏で、満場の聴衆も十分に楽しめたようだ。

2014年9月14日(日)

- 演奏者氏名 竹内 梓
- 主 催 広小路音楽教室
- 演奏研究テーマ フルート・リコーダー演奏会
- 場 所 電気文化会館イベントホール

○目的及び内容

- 目 的 発表会
- 内 容 フルート、ピッコロ、リコーダー、ピアノによる演奏
- 出演者 フルート 竹内 梓、広小路音楽教室生徒
- リコーダー //
- ピアノ 上屋安由美 他

- ・ 2本のリコーダーのための協奏曲ハ長調 A. ヴィヴァルディ
- ・ 2本のフルートのためのトリオソナタ ホ長調 C. P. E. バッハ
- ・ 他

◎研究に関する自己評価及び今後の展望

私の門下生の、日頃の練習成果を発表するため2年に一度開催する、フルート、ピッコロ、リコーダーによる、独奏、重奏による演奏会である。私も、フルートとリコーダーで数人の生徒さんとアンサンブルを共演した。参加者の多い演奏会は事前の準備もさることながら、当日の進行もとても気を使ったが、出演された生徒さん達も皆それぞれ納得のいく演奏の出来栄であったようで安心をした。

2014年9月23日（火）

- 演奏者氏名 竹内 梓
 ○主 催 法蔵院
 ○演奏研究テーマ 法話と音楽の夕べ
 ○場 所 愛知県半田市法蔵院本堂
 ○目的及び内容

目 的 室内演奏
 内 容 フルートと伴奏CD音源による演奏
 出演者 フルート 竹内 梓

- | | |
|---------------|-------------|
| ・アルルの女よりメヌエット | G. ビゼー |
| ・海に見える街 | 久石 譲 |
| ・赤とんぼ | 山田耕筰 |
| ・あの日に帰りたい | 荒井由実 |
| ・瞳をとじて | 平井 堅 |
| ・イパネマの娘 | A. カルロスジョビン |
| ・星に願いを | L. ハーライン |
| ・他 | |

◎研究に関する自己評価及び今後の展望

半田市にある法蔵院本堂での彼岸の法要後のコンサートである。今回で2度目の出演である。演奏会場が寺の本堂であるので前回はハープとのアンサンブルで演奏をしたが、今回は、1時間ほどのプログラムすべてCD音源の伴奏で行った。前もって住職に演奏を聞いていただき了解を得ての開催であったが、当日は聴衆の人数、PAとフルートとの音量バランスなど事前に想定できない事もあり、不安材料も少々あった。しかし、現在はCD伴奏の音質やPA機器の性能の向上のおかげでほとんど違和感なく聴いていただけようだ。初めての企画としては、成功したのではないかと思っている。PA機器については自前の物を使用した。業務用の高性能な機材を使用すればさらに演奏効果はあったかもしれない。

2014年10月27日（月）

- 演奏者氏名 竹内 梓
 ○主 催 中部電力株式会社
 ○演奏研究テーマ サロンコンサート

○場 所 名古屋観光ホテル

○目的及び内容

目 的 レセプションコンサート

内 容 フルート、ヴァイオリン、チェロ、ピアノによる演奏

出演者 フルート 竹内 梓

ヴァイオリン 松実健太

チェロ 小川剛一郎

ピアノ 佐々木仔利子

- ・アイネ・クライネ・ナハトムジーク 第一楽章 W. A. モーツアルト
- ・愛の挨拶 E. エルガー
- ・交響曲第5番「運命」第2楽章 L v. ベートーヴェン(フンメル編)
- ・ボレロ M. ラヴェル

◎研究に関する自己評価及び今後の展望

演奏曲目はすべて編曲作品である。独奏の小品から、弦楽合奏、そして管弦楽曲まで幅広いジャンルの曲を選曲した。編成はすべてフルート、ヴァイオリン、チェロ、ピアノであった。ベートーヴェンの交響曲第5番「運命」第2楽章は作曲者と同時代の作曲家のフンメルのアレンジである。フルートパートについては、オリジナルの交響曲とは編成の相違のせい、演奏するメロディーがかなり違っており、フンメルのフルートに対する楽器観を垣知りすることができる。9曲の交響曲すべてこの編成での編曲版があるようだが、また機会があったら他の曲も演奏してみたいものだ。

2014年11月20日(木)

○演奏者氏名 竹内 梓

○主 催 名古屋音楽大学フルートオーケストラ

○演奏研究テーマ 名古屋音楽大学フルートオーケストラ 第四回 定期演奏会

○場 所 めいおんホール

○目的及び内容

目 的 定期演奏会

内 容 フルートアンサンブルによる演奏

出演者 フルート 名古屋音楽大学フルート専攻生

指揮 竹内 梓

- | | |
|-------------|---------|
| ・華麗なる大円舞曲 | F. ショパン |
| ・組曲惑星より「木星」 | G. ホルスト |
| ・海に見える街 | 久石 譲 |

◎研究に関する自己評価及び今後の展望

名古屋音楽大学フルート専攻生必修授業の管楽合奏のフルートオーケストラ定期演奏会である。私は昨年同様指揮での参加である。今回は、小編成のフルートアンサンブルチームの演奏が数ステージあったので、私の指揮するフルートオーケストラは3曲演奏した。プログラムは、いつも通り耳馴染みのある曲のフルートオーケストラ用編曲作品であった。ホルスト作曲組曲惑星からの「木星」は、もともと大編成の管弦楽曲の編曲であるが、ショパン作曲「華麗なる大円舞曲」はピアノ独奏曲からの編曲であり、本来の軽やかさやスムーズさ、自由さがフルートオーケストラでは表現するのがとても難しかった。特に、テンポに関しては、当日の演奏でも納得がいかなかった。今回で、指揮をするのが4回目であるが、指揮とは自ら実際に楽器を奏して音楽を作り上げる手段ではないが、一見分野の違うような指揮をすることが、自分のフルート演奏のいろいろな要素に間接的ではあるが、大いに影響しているのではないかと改めて実感した。今後も、機会があれば学生達と共演し、課題を克服していきたいと思っている。



2014年12月13日(土)

- 演奏者氏名 竹内 梓
- 演奏研究テーマ クリスマスコンサート
- 主 催 フルートアンサンブル「虹色の笛」
- 場 所 竹内整形外科・内科クリニック ロビー
- 目的及び内容

目 的 ロビーコンサート

内 容 フルートソロ&アンサンブルによる演奏

出演者 フルート 竹内 梓、河合夕起子、小島賢司、杉江厚美
杉本 悠、増岡恵美、溝田生子、三村幸宏

- ・オペラ“イーゴリ公”より「だったん人の踊り」 P. A. ボロディン
- ・バレエ“くるみ割り人形”より「葦笛の踊り」 P. I. チャイコフスキー
- ・ディズニーアニメ“アナと雪の女王”より「レット・イット・ゴー」
K. アンダーソン＝ロペス
- ・アヴェマリア F. P. シューベルト～C. F. グノー
- ・Seagull (海かもめ) 真島俊夫
- ・フルート四重奏曲二長調k v 285より第1楽章 W. A. モーツァルト
- ・クリスマス・イブ 山下達郎
- ・他

◎研究に関する自己評価及び今後の展望

私の門下生のフルートアンサンブル「虹色の笛」のメンバーによるクリスマスコンサートである。会場はいつもの阿久比町にある病院の響きの良いロビーでの演奏会である。今回で8回目の開催となるが、毎回楽器編成に工夫を凝らしたり、耳馴染みのある曲や流行のアニメ映画の主題曲など、時節に合った作品を選曲しプログラミングをしている。特に、今回はメンバーの技術の向上がとても感じられ、演奏の完成度も高く、聴衆にもそのことが伝わり、演奏効果も良く大変喜んでいただけたようだ。さらにその反応は、今後も継続して演奏活動をして行きたいメンバーにとって、とても大きな励みになった。

演奏会報告

■ 露木 薫

2013年5月24日(土) 12:30～ インディアナ大学 Auer Hall

「露木薫・Don Harry リサイタル」

露木薫

Partita BWV.1013 J.S.Bach/ W.Waterhouse

Humoresque A.Bernoud (ピアノ伴奏; 橋本礼奈)

Don Harry

Cello Suite #5 in c minor J.S.Bach 他

5月19日(月)～24日(土) 米国インディアナ大学で行われた International Tuba Euphonium Conference の中で日本からのゲストとして Don Harry 氏(イーストマン音楽学校チューバ教授)とシェア・リサイタルを行った。今回20回目の開催となった記念すべきこの大会は「Where it all began (全てが始まった地)」というキャッチフレーズのもと、1973年の第1回目の開催地であったインディアナ大学で125名のユーフォニウム・チューバ奏者と50を超えるアンサンブル・グループが参加し、隣接する5つの会場で催し物が並行して行われた大変に盛大な大会となった。大会ホストのインディアナ大学終身教授の Daniel Perantoni 氏からの招待を受け、このような大きな大会で演奏出来た事は大変光栄であり、身に余る名誉を感じたステージであった。しかし、それ以上に世界各国から集まった一流のプレイヤー達の演奏会・シンポジウムが連日開催され、この種の楽器の可能性に果敢に挑戦している演奏に心を動かされ、感銘を与える数多くの音楽家達に出会えた事が何よりも大きな成果であった。

演奏活動・研究活動の報告

■ 中川 朋子

2014年3月25日（火） CDをリリース

プロコフィエフ：ロメオとジュリエット(ピアノ版)・中川朋子ピアノ

プロコフィエフ「ロメオとジュリエット」より10の小品 作品75

- | | | |
|-------------------|------------------|--------------------|
| 1 民族的な舞踊 | 2 情景 | 3 メヌエット |
| 4 少女ジュリエット | 5 仮面 | 6 モンターギュ家とキャピュレット家 |
| 7 僧ローレンス | 8 マーキュシオ | |
| 9 百合の花を手にした娘たちの踊り | 10 ロメオとジュリエットの別れ | |

リスト 巡礼の年第2年「イタリア」より

ペトラルカのソネット第104番

ペトラルカのソネット第123番

リスト 巡礼の年第2年 イタリア補遺「ヴェネツィアとナポリ」

第1曲「ゴンドラを漕ぐ女」

第2曲「カンツォーネ」

第3曲「タランテラ」

収録日：2013年4月

収録場所：稲城市立iプラザ

発売元：ナミ・レコード

プロコフィエフの「ロメオとジュリエット」は1935年に完成されたバレエ音楽で、そのオーケストラの響きは登場人物のキャラクターや心情を際立たせ、この物語を一層、感動的なものにしてている。10の小品・作品75はプロコフィエフ自身がピアノの為に編曲したもの。

この音楽を私は実際に自分で音にしてみたいと思いつつも、オーケストラの色彩の豊かさや、重量感などをピアノで表現するのは容易ではないと、中々、手がけることが出来なかった。この頃になって、オーケストラの音色を単に、模倣しようと試みるだけではなく、如何にピアノでこの物語の雰囲気表現するかという所に、面白味があると感じるようになり、今回、全10曲を収録することが出来た。

後半の収録曲はリストの作品。

曲中に潜む悪魔的な響き、又、正反対に宗教的で崇高な世界を連想させ、スケールの

大きさに圧倒されるリストの音楽に、私は学生時代から魅力を感じ、作品に取り組んできた。

リストのピアノ曲の醍醐味は、ピアノの楽器としての可能性を最大限に引き出したところにあると思う。その為、演奏技術、演出力、パワーが求められ、この点がピアニストにとって高いハードルでもある。

数多いリストの作品の中から、今回は、「ロメオとジュリエット」の舞台でもあるイタリアに因んだ曲目を選曲した。

雑誌 CD ジャーナルでは「バレエ音楽としての特性が浮かぶ演奏は無類」雑誌ショパンでは「リストの叙情性あふれる演奏は秀逸」など好評をいただく事が出来、今後の励みとなる。

2014年4月6日(日) 14:00 開演 場所: 5/R Hall & Gallery 音楽ホール
中川 朋子・春のピアノ トークコンサート

チャイコフスキー 「四季」 Op. 37b より 4月<松雪草>

モーツァルト ソナタ第11番 KV331 (300i)

第1楽章 主題と6つの変奏曲 第2楽章 メヌエット - トリオ

第3楽章 「トルコ行進曲」

ショパン ポロネーズ第6番 Op. 53 「英雄」

ラヴェル 高雅で感傷的なワルツ

ドビュッシー レントよりも遅く (ワルツ)

プロコフィエフ 「シンデレラ」から10の小品 Op. 97 より 10. アダージョ

「シンデレラ」から6つの小品 Op. 102 より 4. ワルツ (舞踏会に向かうシンデレラ)

春のコンサートを意識して、リズム感のある踊りの要素を持つ曲目を取り入れたプログラムを作成した。

今回は、気軽にクラシックに親しんでいただくことを考え、トークコンサートとした。トークコンサートは、演奏は勿論、トークも含めた完成度が要求される。トークのタイミングや時間、どの程度まで解説するかなどは、毎回、頭を悩ませる事柄であるが、これからも経験を踏まえて、研鑽を積んで参りたいと思う。

当日はお蔭様で、満席のお客様の笑顔と温かな拍手をいただくことが出来、感謝と安堵。

アンコールはCD収録曲からマーキュシオ、モンターギュ家とキャピュレット家を演奏。コンサート終了後、CD発売のサイン会も催された。

2014年7月20日(日) 場所：高島町文化ホール（置賜地区予選）

第15回山形県ジュニアピアノコンクール予選の審査を務めた。

主催：山形県ジュニアピアノコンクール実行委員会

審査員長・有森博氏、庄子みどり氏

審査員・渋谷るり子、浅野純子、黒川浩、佐藤博幸、植木由利子、松本裕子、田原さえ、田中美千子、鈴木美奈子の各氏と中川朋子

このコンクールの審査員を務めさせて頂いて、毎回印象的なことは、全体におおらかで素直な演奏の中に、参加者が音楽を楽しみ、音楽への意欲が感じられること。今回も、好感を持って聴かせていただいた。終了後は壇上で講評を述べた。

2014年9月23日(火) 場所：鎌倉生涯学習センターホール

第60回鎌倉市学生音楽コンクール（小・中・高）ピアノ部門予選の審査を務めた。

主催：鎌倉音楽クラブ

審査員：鎌倉音楽クラブ会員。

鎌倉音楽クラブは1946年に地域の音楽文化振興のため、音楽評論家・野村光一、声楽家・ベルトラメリ能子、音楽教育家・鏑木欽作、音楽評論家・牧野敏成、ピアノ教育家・山岡寿美子の各氏により創設された。

鎌倉市学生音楽コンクールは1954年から今日まで続く歴史あるコンクール。

今回も、小・中・高の各部門共に参加者のレベルも高く、技術力、表現力豊かで中々、興味深く聴かせていただいた。各参加者に講評を記す。

2014年10月17日(金) 18:30 開演 場所：横浜市健康福祉総合センター10階
エイチ・バイ・スリー桜木町店

第5回みなとみらいコンサート “中川朋子ピアノリサイタル”

シューベルト 感傷的なワルツ D779 Op. 50 より No1, No2

チャイコフスキー 「四季」 Op. 37 b より 10月<秋の歌>

ショパン ポロネーズ第6番 Op. 53 「英雄」

ラヴェル 高雅で感傷的なワルツ
 ドビュッシー レントよりも遅く (ワルツ)
 ラヴェル 組曲「鏡」より 4. 道化師の朝の歌
 リスト スペイン狂詩曲

このコンサートの企画者・島村義孝氏は、2012年まで東京目黒区自由が丘のレストラン「クレチュール」のオーナーで、「クレチュール」はクラシックコンサートが開催されるレストランとして、以前、雑誌ショパンで紹介された。2012年閉店されるまでにチェリストの藤森亮一氏の他、著名な演奏者も多数出演し、耳の肥えた音楽愛好家の客層に親しまれた。私のリサイタルは2002年から2012年まで計10回。

今回、横浜に場所を移し、みなとみらいの美しい夜景を背景に、トークも交えて、楽しく演奏させていただいた。

アンコールはドビュッシー前奏曲第2集より XII. 花火。

コンサート終了後、同場所で、2002年の当初からのお客様や音楽の専門家の皆様、鎌倉音楽クラブの先生方と、自由が丘でのリサイタルと同様に会食と懇談。

トークも含めてコンサート全体に、ご好評をいただくことが出来、今後への励ましと受け止める。

諸先輩から様々なお話も伺うことが出来、大変有意義な時間となった。

2014年11月30日(日) 14:00 開演 場所：ハーモニーホールふくい

めいおん F u k u i 第10回記念演奏会 第1部、第2部 (ゲスト出演)

第1部出演者：三浦恵美子氏、佐々木英宏氏、吉田真里子氏、岡安朋美氏、鈴木睦美氏、南部匡恵氏、高橋かほる氏

第2部：ゲスト演奏

ラヴェル 高雅で感傷的なワルツ ピアノ：中川朋子

ロッシェニ 歌劇「アルジェのイタリア女」よりイタリアの女たちは

バス：森雅史氏 ピアノ：中川朋子

ロッシェニ『セヴィリアの理髪師』より「陰口はそよ風のように」

バス：森雅史氏 ピアノ：中川朋子

フレンニコフ 歌曲『酔っぱらいの歌』

バス：森雅史氏 ピアノ：中川朋子

ヴィンディング クラリネットとピアノのための3つの幻想曲 Op. 19

クラリネット：豊永美恵氏 ピアノ：中川朋子

ヴィンディング作曲「クラリネットとピアノのための3つの幻想曲」は、大変魅力的な作品で、又、協演させていただく機会があればと楽しみにしている。

お蔭様で、このコンサートの盛況の様子は、翌朝の福井新聞に掲載された。

イタリア・ナポリ・サンカルロ歌劇場主催公演

モーツァルト作曲レクイエム出演後記

■ 森 雅史

2013年秋、ドレスデン歌劇場に活動の拠点を移した私の下にイタリアから一通のメールが届きました。送り主はナポリ・サン・カルロ歌劇場(Teatro Di San Carlo)芸術監督ヴィンチェンツォ・デ・ヴィーヴォ (Vincenzo De Vivo) 氏。その用件は2014年6月に同歌劇場でモーツァルト作曲レクイエム KV 626 (指揮: ハンスイェルグ・アルブレヒト 共演: サン・カルロ歌劇場管弦楽団・合唱団) が上演されるにあたり、ソリストとして出演して欲しいというものでした。ミラノ・スカラ座、ローマ歌劇場と並んでイタリア三大歌劇場のひとつに名を連ねる劇場への出演は、歌い手を志してからの長年の夢であり、同時にイタリアの劇場で歌い続けることの難しさから、半ばあきらめかけてもいたので、突然その機会に恵まれた私は、驚きと興奮で震えながらデ・ヴィーヴォ氏に快諾の返信を送ったことを覚えています。

ナポリに入ってからには天候にも恵まれ、リハーサルも順調に運びました。先述したデ・ヴィーヴォ氏はイタリア・オジモにあるオペラ・スタジオの運営や指導にも携わっており、若手歌手のサポートにも非常に熱心なことから、他のソリストにはスカラ座研修所を修了したテノール歌手レオナルド・コルテッラッツィやオジモのオペラ・スタジオを修了したソプラノ歌手ユリア・ポレシュクといった若くて優秀な歌い手が起用されていました。彼らとは年も近く、共通の歌い手仲間が多くいたことですぐに打ち解け、稽古の合間で楽譜の解釈法や歌唱テクニックについてかなり踏み込んだ意見を交わすことが出来ました。指揮のアルブレヒト氏によるバロック的なレクイエム解釈も大変興味深いものでした。サン・カルロ歌劇場のオーケストラや合唱団の演奏は響きが豊かでスケールも大きく、緻密で繊細なドイツの劇場におけるオーケストラや合唱団のそれとは趣が違い、また違う魅力に溢れたものでした。合唱団には、東京芸大大学院時代の後輩も所属しており、ナポリの音楽院やギリシャ・ローマ時代の劇場跡など貴重な芸術史跡を紹介してもらうことができました。歴史あるサン・カルロ歌劇場は、私が所属していたボローニャ歌劇場と比較すると三倍近い収容人数にも関わらず、そのアコースティックは素晴らしいもので、特にその内装の壮麗さは圧巻でした。このプロダクションは、バレエとのコラボレーションという事で企画としても大変興味深く、全公演ほぼ満席で初日前にはプレス向けの取材が入るなど、非常に注目されていたプロダクションだったと言えます。

公演の合間には、ボローニャ歌劇場『椿姫』で共演したソプラノ歌手マリエッラ・デヴィーアのリサイタルがサン・カルロ歌劇場で行われました。ベル・カントのレパートリーが中心の内容でしたが、テクニックに裏付けされた60歳を超えても失われない艶やかな歌声とその演奏スタイルはただただ素晴らしく、改めてたくさんの事を学ばせていただきました。このリサイタルのためにチケット売りに並んでいたところ、あるご婦人から話しかけられ、私が日本人であることがわかると『余ったから…』と、一番音響と見晴らしの良い正面のボックス席のチケットをプレゼントして下さいました。『日本を旅行した時、あなたたち日本人にとっても親切にもらったから…素敵なコンサートを！』と言い残し、笑顔で劇場に入って行かれました。こうした人情味溢れる南イタリアらしい出来事と素晴らしい出会いに恵まれた滞在となりました。

この公演を通じて、現在進行形のイタリアの劇場音楽や歌唱技術に肌で触れられた事は大変大きな収穫であり、こうした経験を自身の研究はもちろん、実際の学生の指導に積極的に活かして行きたいと思います。

最後になりましたが、このナポリ行きを快く後押しして下さい、声楽コースの長野先生と松下先生に厚く御礼を申し上げます。

